

2023年9月3日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

出エジプト記 32 : 1~6

ローマの信徒への手紙 10 : 14~17

「み言葉による礼拝」(第二戒)

(ハイデルベルク信仰問答 第三部 十戒について 問 96~98)

※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【招詞】詩編 33 : 1~5

【讚美歌】27「父、子、聖霊の」

【詩編交読】詩編 38 編

【赦しの宣言】イザヤ書 55 : 7「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讚美歌】18「心を高くあげよ！」

【祈祷】

【聖書】出エジプト記 32 : 1~6、ローマの信徒への手紙 10 : 14~17

【説教】「み言葉による礼拝」

<第一戒と第二戒>

教会で大切にされてきた「十戒」という文章があります。10の戒め、と書きますが、これは10の神の言葉、という意味でもあります。

「十戒」は、わたしたちを罪から救い出して下さった神さまに、わたしたちが心からの感謝をもって、神さまに喜ばれる歩みをしていくため。日々、神さまの御言葉に従って生活していくための、「道しるべ」として与えられたものです。

しばらくは毎週、この「十戒」の戒めを一つずつ、御言葉に聞きながら味わっていきます。

二週間前には、「第一戒 わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない」という戒めを聞きました。

この戒めが求めていることは、唯一のまことの神のみを知り、この方にのみ信頼し、この方のみを愛する、ということでした。

そして、それは同時に、偶像崇拝を避ける、ということでもありました。

偶像崇拝とは、異教の神々やその像を拝む、というだけでなく、まことの神さまに代えて、あるいは神さまと並べて、わたしたちが他に信頼するものを考えたり、持ったりする、ということです。しかし、わたしたちには、イエスさまによって罪から救い出してくださった、唯一の、まことの神さまが共におられるのだから、他のものを神とする必要はない！まことの神以外に、神はないのだ！そう教えられていたのです。

さて、今日の第二戒ですが、「日々の祈り」に冒頭のところだけ書きましたけれども、それはこういうものです。「第二戒 あなたはいかなる像も造ってはならない」。

皆さんの中には、もしかしたら、これもまた偶像崇拝のことを言っているのではないか。第一戒と同じような戒めなのではないか。そう思われる方があるかも知れません。

実際、ローマ・カトリック教会やルーテル教会では、わたしたちで言う第一戒と第二戒は、一つにまとめて第一戒とされ、偶像崇拝を禁じる戒めとして、教えられています。

「十戒」は聖書に語られている御言葉ですが、それをどのように 10 に分けるかは、実は教派によって違いがあるのです。

わたしたちプロテスタント教会の改革派は、「あなたはいかなる像も造ってはならない」という戒めは、第一戒とは別の意味があると考えます。

異教の神々の偶像を拝むことや、まことの神さま以外のものを頼りにする、偶像崇拝については、第一戒で、すでに禁じられていました。では、この第二戒の「あなたはいかなる像も造ってはならない」は、一体わたしたちに何を求めているのでしょうか。

<まことの神を像にすることの禁止>

「第二戒」についての、今日の『ハイデルベルク信仰問答』問 96 を見てみましょう。

「問 96 第二戒で、神は何を望んでおられますか。」

「答 わたしたちが、どのような方法であれ神を形作ったり、この方が御言葉において命じられた以外の仕方では礼拝してはならない、ということです。」

第二戒が「あなたはいかなる像も造ってはならない」という戒めで言おうとしていることは、わたしたちの唯一のまことの神さまを、像に形作ってはならない、ということです。

わたしたちの神さまは、時間も空間も超えているお方であり、目に見えないお方です。その神さまが、この目に見える世界をお造りになった方なものですから、この世界のどんなものも、神さまのことを表すことはできないのです。どれだけ金で飾ろうとも、すばらしい装飾を施そうとも、神さまを地上の被造物で表現することはできません。

ですから、それがたとえ、唯一のまことの神さまを礼拝する目的であったとしても、神さまを像に刻むようなことは、決してしてはならない、と言っているのです。

このことは、今日の旧約聖書の出エジプト記 32 章によく表されています。

これは、イスラエルの民がエジプトから脱出した後、指導者であるモーセが、シナイ山で神さまから戒めを授かっている間に、山の麓で待っていた民に起こった出来事です。

イスラエルの民は、神さまの御言葉に従って、自分たちをエジプトから導いてきてくれたモーセが、山に登ったきり中々降りてこないで、だんだん不安になってきました。

そこで、民はアロンにこう言ったのです。32 : 1 「さあ、我々に先立って進む神々を造ってください。エジプトの国から我々を導き上った人、あのモーセがどうなってしまったのか分からないからです」。

そして民は全員、自分たちが持っていた金を集めてアロンに渡し、若い雄牛の鑄造を造りました。金の雄牛です。そして民は言ったのです。「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上ったあなたの神々だ」。

あなたをエジプトの国から導き上ったあなたの神々。神々、と複数形になっているのは、神さまの偉大さを表すためにそうなった、という説がありますけれども、とにかくイスラエルの民は、エジプトから救い出してくださった、あの唯一のまことの神を、若い雄牛の鑄造にして拝もうとしたのです。

つまり、この金の雄牛は、異教の神の像ではありません。イスラエルをエジプトから救って下さった、あの唯一のまことの神さまを、民は金の雄牛の像にしたのです。

第二戒はこの意味で、「あなたはいかなる像も造ってはならない」と語っているのです。

しかし、なぜイスラエルの民は、唯一のまことの神さまを、若い雄牛の像に現わしたいと思ったのでしょうか。

神さまは、エジプトで奴隷にされていた民の叫びを聞いて、モーセを遣わし、エジプトに災いをくだし、海を割り、荒れ野を導き、民を救われました。イスラエルの民は、その生ける神さまの御業を目の当たりにし、その身をもって、救いの恵みを体験してきたのです。

それなのに彼らは、指導者として立てられたモーセが、山に入って帰ってこなくなっただけで、不安になってしまったのです。モーセがいない。自分たちはこれからどうなるのか。誰が自分たちを導いてくれるのか。心配でたまらなくなってしまったのです。

…これは民が、まことの神さまではなく、目の前にいる人間の指導者モーセばかりに目を留め、頼ってしまっていた、ということかも知れません。

本当は、指導者その人ではなく、その指導者を立てて下さった、まことの神さまをこそ見つめて、その御力に信頼し、より頼んでいるべきでした。

でも彼らは、目に見えるモーセという指導者の存在に頼りすぎて、目に見えない神さまをしっかりと信仰の目で見つめていなかったために、彼の帰りが遅いだけで、すっかり不安に陥ってしまったのです。

そして、もっとよくなかったのは、そこでイスラエルの民が、自分たちの安心のために、自分たちの手元に、側にいてくれる神さまを造って置いておこう、と考えたことです。

神さまの像を造る、というのは、まことの神さまの存在を、自分たちが把握できるようにしようとする事。自分たちの思い通りにしようとする事です。

神さまの像がここにあれば、神さまご自身が、ここにいると思うことができる。そうやって、自分たちの安心のために、神の像を造り、それを礼拝し、不安な心を満足させようとしたのです。

でもそれは、自分たちの手による、束の間の、虚しい満足、空っぽの安心です。神さまの恵みによって与えられる満足、安心とは、比べ物になりません。

民がこの虚しい礼拝をしている間、神さまは、民が神さまの恵みの中で、喜んで生きていくために必要な御言葉を、モーセに語りかけておられるところでした。

でも民は、その神さまの御言葉を待たず、受け取らず、神さまの思いを無視して、勝手に自分たちで虚しいものを造って、拝んで、満足していたのです。これは、いつも彼らを見つめ、語りかけ、救ってこられた神さまに対して、何と失礼な、何と無礼なことでしょうか。

像を拝んでなされた礼拝は、決して神さまに喜ばれる礼拝ではなく、ただ自分たちが喜ぶためになされた礼拝です。そこに、神さまを畏れ、敬い、感謝する気持ちはどこにもありません。それは、礼拝とは呼べません。しかも、彼らはそのために、神さまを自分たちの手の届くところに、被造物の中に、引きずり降ろそうとしたのです。

神さまはこれに対して、激しく怒られます。神さまは、像に刻まれるようなお方ではないし、何より、民が神さまの自由を制限したり、居場所を決めたり、礼拝の主権を握ったりすることは、神さまと人間との関係を逆転させようとする事だからです。

ですから、ハイデルベルクの間 97 にはこうあります。

「問 97 それならば、人はどのようなかたちも造ってはならないのですか。」

「答 神は決して模造されえないし、またされるべきでもありません。被造物については、それが模造されうるとはいえ、人がそれを崇めたりまたはそれによってこの方を礼拝するために、そのかたちを造ったり所有したりすることを、神は禁じておられるのです。」

このように、第二戒は、まことの神の像を造ってはならない、という戒めであり、同時に、神さまに主権があることを忘れないで、自分たちの望む方法ではなく、神さまが望まれる方法で、正しく神さまを礼拝するように、という戒めなのです。

#### <まことの礼拝>

ですから、改革派の教会が、特に第一戒と第二戒を分けて強調した、ということもよく分かります。宗教改革以前、ほとんどの教会は、聖書を自分で読めない信徒のために、神さまについての画像や偶像を信仰教育のために置いていました。それによって、神さまのことや、聖書のことを、信徒に教えようとしていたのです。

でも、改革派の信仰に立つハイデルベルクは、こう教えています。「問 98 しかし、画像は、信徒のための書物として、教会で許されてもよいではありませんか。」

「答 いいえ。わたしたちは神より賢くなろうとすべきではありません。この方は御自分の信徒を、物言わぬ偶像によってではなく、御言葉の生きた説教によって教えようとなさるのです。」

神さまがご自身のことをわたしたちに教え、救いの恵みを与えてくださるのは、物言わぬ絵や、偶像によってではありません。

神さまは、聖書の御言葉によって。それはつまり、礼拝における、御言葉の生きた説教によって、神さまは、わたしたちにすべてのことを教えてくださるのです。

生ける神の言葉によってこそ、わたしたちは神さまを知り、その愛を知り、救いを知り、まことの信仰を与えられるのです。

以前にもハイデルベルクでは、神さまは、耳で聞く神の言葉、つまり聖なる福音の説教を通して、わたしたちにまことの信仰を与えてくださること。また、目に見える神の言葉、つまり洗礼と聖餐の聖礼典によって、わたしたちの信仰を確かにしてくださる、ということが、語られていました（問 65）。

宗教改革は、単に偶像がだめだ、と言いたかったのではありません。むしろそこで強調したかったことは、わたしたちが、自分の望む形の礼拝をするのではなくて、神さまが望んでおられる、神さまに喜ばれる、まことの礼拝をささげるべきだ、ということだったのです。そしてそれは、神さまの生きた御言葉が語られる礼拝であると。

だから、プロテスタントのわたしたちの教会は、神の言葉である、御言葉の説教と聖礼典を、礼拝の中心に据えているのです。

御言葉による礼拝は、神さまの生きた語りかけを聞く礼拝です。それは、聖霊によって、わたしたちの内に、信仰が起こされる礼拝です。イエスさまの十字架による救いが示され、罪の赦しが宣言され、復活のイエスさまとの交わりに生かされる礼拝です。そして、わたしたちの内に、心からの悔い改めと、感謝と、喜びが溢れだす礼拝です。

わたしたちを愛し、憐み、導いて下さる、生きた神さまの御言葉が語りかけられるところでこそ、このまことの神さまに対する、わたしたちの心からの応答としての礼拝がささげられます。わたしたちは、神さまの生きた御言葉を語りかけられるからこそ、生きておられるまことの神さまを知り、この方を信頼し、心から崇め、従っていくことができます。そして、そのような礼拝をこそ、神さまは喜んでくださるのです。

#### <理想の神さまを造ること>

さて、ここまで聞いてきましたように、わたしたちが、まことの神さまの像を形作る、という行為が意味していることは、わたしたちが、まことの神さまを、自分に都合のよい神さまに仕立てようとしている、ということです。

そうであるなら、木材や金で像を彫るのでなくても、わたしたちが、神さまに対して、勝手な思い込みやイメージを持つこと。神さまを、こういうお方に違いないと、自分の理想に当てはめること。神さまはこうしてくださるはずだ、と決めつけること。これらもまた、神さまの偶像を造るのと同じ行為である、と言えます。

そしてこれは、わたしたちに、とても起こりやすい過ちなのです。

神さまに、こうしていただきたい。神さまなら、こうしてくださるはずだ。わたしたちは、神さまがなさろうとしていることを知る前に、まず自分がして欲しいことを、神さまに求めてしまいます。そしてそれは、イスラエルの民がそうであったように、不安や恐れが大きいほど、苦しみや悩みが深刻であるほど、自分の思い、自分の心の声が大きくなっていくのです。やがて、わたしたちは、自分の声しか聞かなくなり、神さまに耳を傾けることなく、不平不満を訴え、疑いを抱くようになるのです。

また、ある人は、わたしたちが持つ「計画」もまた、金の雄牛である、と言いました。

わたしたちは自分の思いで、色々な計画を立てます。わたしたちが立てる計画は、自分にとって心地がよく、喜びが多く、また苦勞の少ない「計画」です。そして、できれば、その通りにことを進めてくださるようと、神さまに求めるのです。

でも、すべてを支配しておられる神さまは、わたしたちの思いを遥かに超える、最もよいご計画を持っておられます。そして、神さまは、そのご計画を実現するために、わたしたちにとって最もよい時に、最もよい仕方、導いて下さることがお出来になります。

そうであるなら、わたしたちは、この方の御手にすべてをお委ねし、あなたのご計画が実現しますように。あなたの御心がなりますように。お言葉どおり、この身になりますように。そう祈り求めることが、わたし自身にとって、最もよい道であるはずなのです。

神さまのご計画は、必ずわたしたちに、より豊かな恵みと祝福を与えるために、完全に備えられているものだからです。

それなのに、どうしてわたしたちの小さな、自分勝手な、破れだらけの計画に、神さまの御心を合わせてもらわなければならないのでしょうか。反対なのです。わたしたちが、神さまのご計画に合わせ、神さまの御心に従っていくべきなのです。

神さまのご計画が、恵み豊かで、確かで、愛と憐みに満ちていること。そして、必ず実現するということは、神さまご自身の御言葉によって、つまり、イエスさまの救いの御業によって、すでに実証され、保証されています。だから、わたしたちは安心して、信頼して、神さまに自分を委ねてよいのです。それが、わたしたちの信仰の歩みなのです。

#### <キリストの言葉>

今日のローマの信徒への手紙 10:17 には、「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです」とありました。

信仰。まことの信仰とは、神さまが御言葉によって、わたしたちに示してくださったことを、わたしたちが、真実である、まことである、と確信することです。そして、神さまに心からの信頼を寄せることです。

この信仰は、神さまへの確信は、信頼は、神さまの御言葉を聞くことによって与えられる。しかも、それは、キリストの言葉を聞くことである。そう語られています。

キリストの言葉とは、神の御子イエスさまご自身が語られたこと。また、イエスさまご自身の救いの御業について語られたことです。つまり、わたしたちに、救いを告げ、命を約束する、聖書の福音の御言葉です。

父なる神さまは、地上に遣わされた御子イエスさまを通して、またその御言葉を通して、ご自分のことを、救いのご計画を、愛の御心を、わたしたちに教えてくださいました。

それは、わたしがこの世で生きる、苦しみ、悩み、痛み、悲しみを、すべてご存知でいて下さるということです。わたしがどんなに悲惨な罪人でも、決して見捨てないということです。わたしの罪を赦し、生かすためになら、御子イエスさまの命を与えて下さるほどに、わ

たしを愛して下さっているということです。そして、イエスさまの十字架のゆえに、わたしの罪を赦し、イエスさまの復活のゆえに、神さまとの交わりに生きる新しい命を、わたしに与えて下さる、ということです。

この語られた御言葉が、真実であるからこそ。これらがすべて、まことに実現し、まさにわたしたちが今、この恵みに生かされているからこそ。わたしたちは、神さまの愛に確信をもち、神さまのご計画を信頼し、すべてをお委ねし、神さまをわたしの主なる神として、礼拝をささげ、歩んでいくことが出来るのです。

「第二戒 あなたはいかなる像も造ってはならない。」

これは、自分の心の思いではなく、御言葉に示された神さまの御心に従って、神さまに喜ばれる礼拝をわたしたちがささげるようになるためです。そしてわたしたちが、御言葉から、まことの神さまを知り、まことの救いを正しく受け取り、より神さまを信頼し、より喜びと感謝に溢れて信仰の日々を歩んでいくために、与えられた御言葉なのです。

【お祈り】 天の父なる神さま

あなたは御言葉を通して、御子イエスさまを通して、ご自身の愛と、御心と、ご計画をわたしたちに示して下さいました。あなたは御言葉によって、わたしたちを、ひたすら愛し抜き、赦し続け、あなたの救いの完成へと導いて下さることを、教えて下さいました。

わたしたちが、恐れや不安によって、誘惑に負けることなく。弱さによって、あなたを悲しませることなく。ただ、あなたの御言葉から、強さも、励ましも、癒しも、慰めも、いただくことが出来ますように。そして、そのように愛して下さいあなたを、わたしたちが心からの愛と信頼をもって、礼拝することが出来ますように。

今日は、聞く御言葉と共に、見える御言葉である聖餐の恵みにあずかります。見えないあなたへの確信を強めるために、あなたが用意して下さいました御言葉の糧を感謝いたします。わたしたちが、より信仰を確かにされ、心からあなたを崇める者とされますように。

このお祈りをイエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讚美歌】 55 「人となりたる神のことば」

【信仰告白】 ニカイア信条

【聖餐】 【讚美歌】 79 「みまえにわれらつどい」

【十戒】 【献金】 65-1 「今そなえる」

【主の祈り】 【祈祷】

【讚美歌】 28 「み栄あれや」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン